

第3回 京都市基本計画審議会 摘 録

日 時：令和2年1月14日（火） 17：00～19：10

会 場：京都経済センター 2階 京都産業会館ホール 北室

出席者：

- | | |
|-------|--|
| 安保千秋 | 弁護士 |
| 池坊専好 | 華道家元池坊次期家元 |
| 内海日出子 | 公益社団法人京都市保育園連盟常任理事 |
| 奥野史子 | スポーツコメンテーター |
| 川崎雅史 | 京都大学大学院工学研究科教授 |
| 曾我謙悟 | 京都大学大学院法学研究科教授 |
| ○塚口博司 | 立命館大学理工学部特任教授 |
| 仁連孝昭 | 滋賀県立大学名誉教授 |
| 原良憲 | 京都大学経営管理大学院教授 |
| 廣岡和晃 | 日本労働組合総連合会京都府連合会会長 |
| 前田康子 | 公益社団法人京都市私立幼稚園協会前理事 |
| 牧紀男 | 京都大学防災研究所教授 |
| 松井道宣 | 一般社団法人京都府医師会会長 |
| ◎宗田好史 | 京都府立大学大学院生命環境科学研究科教授 |
| 村井信夫 | 社会福祉法人京都市社会福祉協議会顧問，京都市市政協力委員連絡協議会代表者会議代表幹事 |
| 山本菜摘 | 市民公募委員 |

1 開会

2 議事

(1) 市民参加の取組について

宗田会長

第1回審議会において事務局から報告があったとおり、本審議会と並行し、若手市民・市職員グループの活動を通じて、次期計画の内容を策定過程から市民に共有するとともに、各団体の取組内容やこれからの京都に期待すること等の意見聴取を行っている。本日は、京都市基本計画審議会規則第3条第5項に基づき、市民グループを代表して、株式会社美京都の代表取締役中馬一登氏に出席いただき、御発言いただきたいと思うが、いかがか。

—（異議なしの声あり）—

宗田会長

それでは、中馬氏に入場いただきたい。

—（中馬氏 入場・着席）—

宗田会長

それでは初めに、市民参加の取組について、事務局から説明いただきたい。よろしく願います。

○事務局から資料4「市民参加事業U35プロジェクト（仮称）について」及び資料5「若手市民グループへの個別ヒアリング結果一覧」を報告

宗田会長

只今の報告に関連して、本日お越しいただいた中馬さんから一言頂きたい。

中馬氏

私の会社はインバウンドや教育系の事業を行っている。いかに世の中を良くするかという観点から取り組んでおり、インバウンドに関しては古民家を宿泊施設に再生するとともに、歯ブラシを竹のものにし、歯磨き粉もプラスチックを使わないタブレット型の歯磨きセットに変えていくサービスなどを企画している。教育については、学校を中退した子や少年院を退所した子などが好きなことを見つけ、したいことができるように伴走し、起業志望の子であれば起業するところまでサポートする事業や、学童に入っている子、発達障害の子などに対してプログラミングを教えるサービスなどを行っている。

今回、35歳以下の若者が集まるこのU35プロジェクトに入れてもらったのだが、京都には35歳以下の面白い人が大勢いるものの、ばらばらで一つになっていない。それをこのプロジェクトで一つにできるのではないかと思う。あらゆる角度から世の中を変えるプロジェクトになればと思っている。よろしく願います。

宗田会長

基本計画としては、次の5年をどうするかと合わせて、さらにその先も見据えている

のだが、京都の未来にどのような思いを持たれているか。

中馬氏

35歳以下のメンバーと話す中では未来は明るいものと思っている。これからは答えのない時代になり、優秀な経営者や現在活躍されている方であっても予測できない世の中になる。今後は一層、クリエイティブな感性が問われると思っており、そこを35歳以下である私たちが感性をさらに磨き、京都を引っ張っていくという明るい気持ちを持っている。

宗田会長

京都は創造性を持った人を集める力があるまちだろうか。これからより一層そのようなまちになってほしいという思いで計画を作っており、若い方に伺いたい。

中馬氏

現在、キーポイントとして言えるものはないと思うが、京都で面白い企業を立ち上げたい人が集まってきているのは確かだ。SNS等でそのような声が広がっており、各地方の若手経営者から京都は盛り上がっているという声を頂いている。重点戦略等でその流れを後押しできれば面白いと思う。

宗田会長

先ほどお話いただいたインバウンドや古民家再生の取組等は京都らしい特徴があるものであり、そこに共鳴して京都が良いと思ってくれる人がいれば良いことだと思う。

川崎委員

御活動の中で震災ボランティアや、障害者や若い人の就職先を広げること、外国人とのシェアハウス運営など、新たな人材育成の可能性としてかなり幅広い取組を行われている人たちに意見を頂いている。この多様な人たちを集め、一つの方向に統合していくに当たっては、どういう形でクリエイティブな仕組みを作り上げていくのか。SNSを通じて情報共有を行い、士気を高めていくなど、様々なやり方があると思うが、その点を伺いたい。

中馬氏

今回、初の取組でもあり、今ばらばらの人たちの間にシナジーを生んでいくに当たっては、まずは現在活躍している35歳以下のメンバーを100名ほど一堂に集めようと考えている。そのうえで、トークイベントなど、これからのキーワード等を考えるものを企画し、100人が共通認識を持ったうえで、8つの重点戦略に即したようなプロジェクトをつくり、興味を持った人を振り分けてから、繋げていくことを考えている。まずは共通認識を持ったうえで、プロジェクトを作り、そこに参加してもらう形が良いのではと思っている。

安保委員

中馬氏をはじめ、各企業の代表者の方はクリエイティブな御意見を持ち、先進的に活動されていると思うが、一緒に活動される職員の方が必要だと思う。一緒に活動する若い方々としては、どういう方が参加するのか。

中馬氏

現段階ではコアメンバーとして10～15名ほどで議論しているが、今後は多様な方々が必要だと思っている。全員が経営者ではいけないと思っており、職人やサラリーマンの方にもバランスよく参加いただきたい。現在はそれをどのように実現するかを検討しており、相互に信頼できるメンバーが集まるよう、それぞれが知っている人に声を掛けながら繋がりを増やしていきたい。

宗田会長

学校を中退した子や少年院を退所した子など、様々な背景のある起業志望の方の応援をはじめ、若者のキャリアの幅を広げたいという思いを持っておられるのだと思う。

それらの取組は誰一人取り残さないというSDGsの標語にもかなうものであり、非常に重要な素晴らしい取組である。今後の取組に期待したい。

(2) 重点戦略について

宗田会長

前回の審議会でも8戦略の大枠を固め、その後、委員の皆様にも個別に御意見を伺い、本日の資料をまとめている。まずは資料について事務局から説明いただきたい。

○事務局から資料6「次期基本計画における重点戦略文案」を報告

宗田会長

世界の文化首都・京都戦略から順番に御意見を伺いたい。

池坊委員

全体を通して、シンプルで分かりやすく収斂した。文化についてはこれまでである伝統文化、日々の暮らしの文化を尊重しつつ、新しい文化を創造・発信していく京都の姿勢がよく反映されている。

文化においては、新しい概念や価値観を作るとともに、今あるものを生かしながら好循環させることが重要。一つ一つが単独で存在するのではなく、それぞれが関わりながら成熟していくもの。そうした循環・連携といった趣旨や文化を支える自然環境・背景もきちんと反映されており、良いと思う。

言葉だけではなく、実際に人が関わることで、どのように実現していくかをこれから細かく見ていきたい。

宗田会長

京都の自然の豊かさが華道や茶道に結び付いていると常々仰っている。社会・経済価値創造戦略には、京都の知恵を生かすと記載しているが、例えば孤立などに対しても文化が価値を創造できる側面があると思う。烏丸通を歩くと、池坊があり、花屋もある。京都のまちや暮らしには、そのような近所の花屋で自然のことを教えてもらえる良さがあり、そうした連携や支え合いが文化をつなげていくことになるのだろう。

池坊委員

文化と経済は全く違うものではなく、文化活動が経済活動にもつながる。また、経済活動からこれまでと違った文化が育まれる側面もある。それを切り分けるのではな

く、京都らしく広い視野で融合しながら捉えていくことが重要だと思う。

山本委員

世界に輝く観光戦略とも重なるが、SNSを通じて京都をプロモーションしていくことが重要だと思う。昨日、成人式だったのだが、体感としては8割ぐらいの同級生がSNSを利用していた。旅行でSNSを活用する方が増えていると思うが、紙媒体に比べ、旬な情報をスピード感をもって無料で共有できるのがSNSの良いところ。そのうえ、いいね！を押すだけで他の人にシェアすることもできる。市からの公式の発信やインフルエンサーを通じた発信など、SNSの活用方法は様々だと思うが、学生からの発信にも注力してはどうか。

私が所属する京都学生広報部にはSNS班がある。地方や海外から京都の大学に来ている学生もSNS班に所属しており、京都の外からの視点も取り入れながらSNSを活用している。メリットばかりではないと思うが、世界に発信していくうえでは大切なことだと思う。

宗田会長

SNSを通じて京都を発信するに当たって、京都らしい言葉遣い、表現や魅力を発見する京都らしいインフルエンサーが出てくるとよいと思う。

続いて、脱炭素・自然共生・循環型まちづくり戦略について、御意見を伺いたい。

仁連委員

基本的にはうまくまとまっている。以前お話したように、低炭素から脱炭素に進めるには、課題の質がこれまでとは異なってくる。そのためには、都市環境と価値観の転換が一番重要であり、イノベーションの部分も含めて、うまくまとまっている。

宗田会長

「しまつ」や「もったいない」などは、素晴らしいことだが、これらが日本人の根底にあるため、脱炭素を我慢しないといけないこと、苦しいことだと感じてしまう。国際的にアンケートを取ると、日本人は環境を守ることはとても良いことである反面、苦しいものであるとネガティブにとらえている側面がある。

仁連委員

文化の話にも関わるが、かつては四季折々の変化を生かしたくらしをしていた。それが脱炭素であり、1年間同じ暮らしをしようとする石油に頼らざるを得ない。四季折々の生活の変化を楽しむことが京都の文化だったはずであり、「しまつ」や「もったいない」だけでなく、その観点も入るとよいと思う。

宗田会長

そうした取組がおしゃれなもの、美意識の高いものだという意識が出てくると良い。

仁連委員

脱炭素はしんどいと思うと実現しない。みんながそこに行きたいと思わないといけない。

宗田会長

日本人は真面目過ぎて、必ず達成しなければならない、と躊躇してしまう。楽しい明るい未来を創ると捉えてもらえれば良いのではないか。そういったものが京都の風土、文化の中から育まれると良い。

続いて、「次代の担い手成長支援戦略」について、いかがか。

内海委員

以前の審議会で、育成ではなく、支援という表現の方が良いという御意見を他の委員が発言しておられたとおり、育成ではなく、自然と身に付いていくことが重要で、それを成長と表現するのは素敵なことだと思う。社会全体で一緒に育てた子どもが京都を支えていく子どもになっていくだろう。「～し合う」という表現が京都ならではの子育て文化を表しており、そのような言葉で子どもたちの成長を見守れば良い。

前田委員

先日孫が生まれた。娘が母になれるか心配していたが、妊娠して子が生まれると母の顔になった。娘の夫も甲斐甲斐しく子育てしており、その幸せそうな姿を見るとやはり子どもを生き育てていく人たちを支えていかなければならないと実感した。

少子化が進んでいることは否めないが、長い歴史の中では様々なものが関わり合い、成熟していく。子どもを生き育てるということにも成熟する部分があるのではないか。例えば、ドイツではバギーを押しているときに建物に入ろうとすると誰かが必ずドアを開けてくれると聞いた。そうした風土は日本にはまだないが、希望を捨てずに、成熟していく中でそのような風土が生まれればと感じている。

また、妻の出産に立ち会った旦那さんはその後の子育てにも関わっていくようになり、母親が子どもに対して感じるのと同じような脳波が出ているという研究があるそうだ。

一昔前の男性は母親に子育てを任せていたが、今の男性は子どもの変化を感じやすくなっているように思う。そういった点は光が見えている、成熟した部分だと思う。

少子化ではあるが、みんなで子どもを育てていく京都になっていくと良い。

宗田会長

子育てするお母さんに対して社会全体が冷たいのかもしれない。都市計画の分野では、保育所などの福祉施設の建設に対する反対運動が地域で起こることを「施設コンフリクト」と呼ぶ。社会の寛容さが足りないのか、あるいはもっと深い問題なのかもしれない。

子どもが生まれることを喜ぶ価値観を共有し、自分の子や孫だけでなく他の子どもも同じような目で見られるようになると良い。

安保委員

色々な内容を分かりやすくまとめていただいている。近年は家族が著しく多様化している。昔は家族とはこういうものだという固定的なイメージがあり、そのイメージに向かうことが幸せだったが、今はそれが重荷になっており、違う生き方を選ぶ人も増えているので、そこをもう一度考え直す必要があるのではないか。結婚して子どもができる生活を家族だと思っただけでなく、それ以外の家族、ひとり親なども歓迎しないと、社会として成長を支えられない時代になってきた。家族の多様性、家族の価値観は人それぞれになってきている。民法の分野でも家族法の改正が大きな話題になっており、日本では離婚すると単独親権になるのが従来のスタイルであったが、離婚後も共同親権を維持

する方向に転換しなければならないのではないかという法的な議論も始まっている。結婚していてもしていなくても、また、離婚していても、子育てへの親の関わりは同じはずであり、家族の形態に関わらず、親が子どもにきちんと関わっていかなければ、成長は支えられない。その点からも、成長する人に視点を持った戦略にさせていただいたことは非常にありがたい。

宗田会長

シングルマザーなど、家族の在り方を柔軟に認め合い、色々な形で子どもを育てていく社会的な寛容性が必要。京都が進めてきた「はぐくみ文化」をさらに一歩進めて、そうした社会に向けて転換を図りたいということが柱の一つである。

奥野委員

私の住む地域が特別なのかは分からないが、私の町内では、昨年、地震があった際にも近所の人々が心配して声を掛けてくれるコミュニティがある。

世代間の断絶やコミュニティの多様化の中でも今あるものにプラスアルファしてお互いを認め合える地域社会を構築していくことが重要だと思う。

また、次の戦略にも関わるが、スポーツ振興が健康長寿だけに関わる形になっている。スポーツには子どもを健康に育成することや競技力の向上などの側面もある。キーワードには、ゴールデンスポーツイヤーズのことなども触れられているが、重点戦略の文案を作成した後、別途何か加わってくるのか。

宗田会長

重点戦略自体を修正することもありうる。アスリートのセカンドキャリアのことなども踏まえ、地域力・福祉力を高めて支え合うまちづくり戦略のところにスポーツを加えたが、スポーツは子育てなどにも関わるものだ。

奥野委員

例えば、引きこもりの子どもたちがアスリートと一緒に運動することで外に出てくる取組なども東京などでは行われている。人材育成などにも関わるので、健康長寿以外でもスポーツに触れていただきたい。

宗田会長

アスリートが社会に参画することで、社会をより良いものにできるし、それによってアスリートのセカンドライフも充実するという御示唆を頂いている。次の時代に向けて、アスリートの社会貢献にもう少し触れた方が良いという御意見か。

奥野委員

オリンピック・パラリンピックもあり、それらの良い遺産が東京だけでなく、日本全体に残ると思う。ゴールデンスポーツイヤーズにそれらをうまく活用できるように、ハードだけでなく、ソフト面も含めて考えたい。パラリンピックを見ることで、多様性について、考える人も増えることだろう。

事務局

スポーツについては、分野横断的に取り組んでいるものであり、健康長寿以外にも記

載すべき分野があるとの御指摘はもつともである。重点戦略とは別に、政策の体系の一分野としてスポーツを位置付ける予定だが、重点戦略にどのように記載するのが良いか、また御相談させていただきたい。

宗田会長

キーワードはオリンピックのレガシーをソフトの面で残していくということ。地域社会・高齢社会の世の中を良くすることにも通じるものであり、今回の売りになるポイントだと思うので、検討いただきたい。

続いて、地域力・福祉力を高めて支え合うまちづくり戦略について、いかがか。

曾我委員

個別の戦略というよりも全体について、意見を述べさせていただく。全体を通してみると、各委員から出た御意見が非常に網羅的に盛り込まれている。一方で、全体の作りとしては、4つの課題や時代の潮流が重点戦略とどのようにつながっているのかが分かりにくい。

それぞれの課題に対して、どこまで対応しようとするのか。例えば、少子高齢化に対して、子育て支援など以上に、外国の方にもっと住んでもらえるように受け入れていくようなところまで考えるのかは明確ではない。

また、網羅的なように見えるが、山本委員が仰るようなことも含め、消費活動など、普段我々が暮らしている中での記載があまりなく、京都でどういう暮らしができるのかという点が弱いと思う。

情報についても、新しい媒体も含めて、一般の市民の生活がどのように変わっていくのかが見えづらい。この計画は、担い手の立場から書かれている、また、行政がやろうとしていることを書かれているからだろうと思うが、日常生活の中で我々がどのような取組を行えば良いのかという点が見えにくいのではと感じる。

宗田会長

市民と行政、あるいは、市民同士がどう情報をやり取りするかについて、各戦略に「信頼」の観点をに入れてはどうかという御意見も以前に頂いているが、分かりやすく伝えるためにはどうすればよいだろうか。

曾我委員

消費であれ情報であれ、計画に必ず入れないといけないわけでもなく、

私自身も明確なスタンスがあるわけではないのだが、色々なことをケアしているように見えて、扱われていない側面があることがよいのかという疑問は残った。

宗田会長

その観点もぜひ盛り込みたい。基本計画には、市民の皆様とこういう方向性を目指すということを確認する役割もある。社会を良くしたいとは思っているが、どう社会に関わればよいかが分からない人も多いだろう。そうした人にも参加していただくことが地域力・福祉力を高めることになると思うが、うまく表現できないだろうか。

行政計画という範疇を一步出て、市民一人一人が社会に関わっていくうえで、そういうことだったら私も参加できる、と思ってもらえるようなメッセージを書きたい。

曾我委員

そういう方向であれば、入れていただいた方が良いだらう。例えば、消費の際にフェアトレードを意識することが豊かさにつながるといったことのように、自分には関わらないと思っている人にも社会や経済との関わりを感じてもらえるような計画にできれば良いと思う。

松井委員

綺麗な言葉が並んでいる前向きな計画という印象を受けた。一方で、作成根拠には前向きなこと以外のことも盛り込まれており、セットで考えていくべきなのだろう。医療に携わっている私の立場では、今後、人口減少という右肩下がりの局面をどう乗り越えるかということが根底にある。今を生きる我々にとっては、次の世代の方々に、どのような道筋を示すのか、また、その道筋に対して、どのような批判を受けるのかが大きなテーマ。

例えば、近年、人口が増えている地域は、東京周辺と愛知、福岡、そして沖縄。沖縄以外は大都市に人が集まっている。やはり人がいるところ、つまり教育環境や仕事があり、社会保障が充実しているところに人が集まる。

超高齢化社会において、高齢者をどのようにケアしていくか、子どもたちを社会でどのように育てていくか、すなわち、弱い人をどう支えていくのかといったことは他人事ではなく、みんなごとで考えるべきこと。数少ない若い人たちに社会に参加してもらい、お互いに助け合う共助の精神をどのように醸成していくのか。この点をどのように訴えていくのかが重要だと思う。

宗田会長

2040年に向け、多死社会がやってくるという医療の現実がある。家族の形が変わる中で医療にどこまで求めるのかといった課題があり、その先にはさらなる人口減少社会が待ち構えている。それを認識していない若者に現実を伝えることなく、これからの社会を担ってほしいとは言えない。その事実をどのように伝えていくかが難しいところだと思う。

松井委員

大変だと言うと参加してもらえないのでこういった計画では前向きな表現になるのだろうが、これからは大変な時期を迎える。昨年生まれた子どもが86万人、亡くなった方が137万人であり、51万人が消えたことになるが、その数は今後さらに拡大するだろう。

少子化対策には二つあり、出生率をどのように上げるのかということと、人口減少にどのように対応していくのかがある。しかし、少子化対策という言葉でくくられてしまい、具体的な言葉にならないことが懸念される。

宗田会長

都市計画でも空き家をどう更新していくかなど、人口減少は重要な問題だと認識している。京都は福祉施設や病院が整っており、比較的シームレスに老後を送れるまちだと思う。老後の最後の10年を過ごすに当たっては、他のまちよりは安心できるとは言えないだろうか。

松井委員

京都も決して安心はしてはられない。京都は生まれる人と亡くなる人の自然動態では減少傾向にあるものの、社会動態の動きが活発で、転入が多いため、人口減少のペースは緩やかになっている。

京都にこれからも多くの方が転入し、新しい生活を送っていただくことで京都がよりしっかりした都市になっていくことが重要だと思う。

また、医療については、病院がストックの例示として出てくるだけとなっているため、もう少し記載してほしい。

宗田会長

先日、あるお坊さんと話した際、「よくお葬式仏教と言われるが、亡くなる前からお坊さんが関わり、心安らかに涅槃を迎えてもらう文化力があるのが京都の特質」と仰っていた。

医師会は中心となってその文化を支えている団体だろうと思う。

松井委員

全くそのとおりで、そのために京都にマンションを買うお年寄りもいるくらいのブランド力が京都にはある。最期まで安心安全のまち京都というのは一つの方向性かもしれない。

村井委員

市政協力委員を引き受けており、行政の方々とも取り組んでいるが、地域における人のつながりを保つことはなかなか難しい。その中では、性別にこだわらず、女性の活躍が重要。女性は素晴らしい決断力、実行力を持っておられる。そういった方々に活躍してもらうことが重要。

宗田会長

醍醐のコミュニティバスが注目を浴びているのは、そういった力を生かし、人口減少の中で維持していることが一つの大きな理由であると思う。

村井委員

醍醐コミュニティバスは昨年11月に800万人の乗車を達成した。これらを地域の力で実現していることが、全国各地から視察に来ていただいている大きな理由である。

宗田会長

女性の活躍の観点はもう少し触れてもよいかもしれない。

続いて、強靱なインフラ整備戦略について、いかがか。

牧委員

表現を整理していただき、文章がすっきりした。インフラはすべての活動を支えるベースであり、そこがしっかりしないとうまくいかない。インフラというとハードだけを想像しがちだが、消防や医療など、ソフトのインフラも重要。その点についても綺麗に表現していただいております、行政として、取り組むべきこともうまくまとめていただいている。

宗田会長

いのちとくらしを守るという表現で市民にうまく伝わるだろうか。阪神大震災から25年が経ち、今後、災害も激甚化する中で不足している観点等はないだろうか。

牧委員

いのちとくらしを守るという観点に加え、都市活力の観点も入っており、うまくまとめていただいていると思う。

松井委員

いのちとくらしをまもるためには、有事の際だけでなく、平時からの意識も重要。そういった意味で、地域包括ケアシステム等の表現を加えていただけると良いのではないかな。

宗田会長

地域力とインフラ整備がシームレスにつながることは確かに重要だ。

牧委員

医療など、ソフトの部分もこの戦略をベースとして位置付けられるとよいのではないかな。

宗田会長

あえて暗いことを申し上げるが、今後は京都でも一人暮らし世帯が増え、高齢化が進むため、孤独死が増えてくるだろう。これは地域力を使って防いでいくしかない。

松井委員

京都市は独居老人宅への全戸訪問を実施されている。労力はかかるが、この取組は市民に大きな安心感を与えている。このような取組を今後も続けていくことが重要。

塚口副会長

この戦略で、「そのために」と書いてその下段をいくつかにまとめているが、いのちとくらしを守る、活力を高めるといったことと比べ、既存施設の有効活用という項目名があまりうまい表現ではない。本質に影響するものではないが、具体的にどのようなことを目指しているのかを表現した方が良いのではないかな。

また、土地・空間利用と都市機能配置戦略については異論ない。以前の案では、歩いて楽しいまちづくり戦略という戦略名であったが、これは京都市全体の交通戦略としては少し小さい。ただし、歩いて楽しい持続可能なまちを構築するというのは高次の概念になっており、これで結構だ。

川崎委員

インフラ整備戦略について、専門家は分かるが、市民にどう伝わるかを考えたときに、インフラがどこまで守れるかを理解してもらうことが重要。現状の劣化の状態等を伝え、予算がない中で知恵を出し合い、限界をどのように乗り越えていくかという課題も含めて理解してもらう必要がある。

また、地域包括ケアシステムについても、ハード面に限らず、先端技術や情報ネット

ワークを利用しながら進めることが重要であり、情報インフラのことも触れていただいたので具体的なツールとして利用できるのではないだろうか。

全体については、今までの議論にも通じるが、スポーツ振興や京都ならではの知恵を生かしながら社会力を強めていくことなど、より包括的な目標像が必要ではないか。全体として京都八策という形になっているが、それが8つの戦略の図面を見ただけでは分かりにくいように思う。全体を総括してまとめたフレーズがいないのではないか。歴史や自然環境等を基盤にしながら、活力や成長を図る観点も踏まえたキャッチフレーズを検討いただければと思う。

土地・空間利用と都市機能配置戦略については、これまでの都市計画審議会等での議論を交通の側面も含めて盛り込んでいただいている。最終目標としては活力ある産業という言葉を出しているが、最後の包括的な目標は地域力・人間力の向上につなげていくことだと思う。

宗田会長

重点戦略の冒頭に何かを盛り込むことを検討したい。

廣岡委員

うまくまとめていただいている。京都は職業としては非常に幅広い選択肢がある。ものづくり、伝統産業、そして大学のまちでもある。この中身で十分だと思う。

ただし、京都に住むに当たって住宅が高いので、実際に戦略を進める中で、空き家対策などに取り組むことが重要だと思う。大学生にはシェアハウスなども広がっており、安く生活することができるのであれば、京都の企業を選ぶ方も増えると思う。大企業も開発拠点を京都に持ってくる動きもある。労働組合も経営者と共に重点戦略にのっかって進めていきたい。

宗田会長

住宅事情に関して、不動産統計を見ると京都は全国平均よりも中古住宅の流通量が多い。

町家を買いたいというニーズがあるほか、地元の不動産業者が学生アパートや、女性の単身者向けシェアハウスなどに中古住宅等をうまく活用している。住宅ストックを活用すれば、街中でもくらせる可能性は大きい。地味な取組なので前には出ていないものの、全国と比べるとよい成績を上げていることはお伝えしておきたい。

原委員

多面的側面を良くまとめていただいているが、さらによくするために2点申し上げたい。京都の知恵を生かすとあるが、その知恵とは何なのか。文案の冒頭の「京都に積み重ねられた～「めきき」、「たくみ」といった資産」の部分がわかりにくい。知恵とは、連綿とした知識とそれを活用する仕組みの2点ではないだろうか。それを踏まえると、京都に積み重ねられた伝統や芸術文化等の知識としての知恵、さらには、京都が育ててきた、めききやたくみといった人材等の資産を生かす仕組みとしての知恵といったことを補ってはどうか。従前からあるものと新しく取り入れたものの両方があったほうが、知恵をどう使おうとしているのかが分かりやすいと思う。

2点目はスタートアップ・エコシステムについて、ここは環境や Society5.0 などの新しい仕掛けをアピールするところである。器としてどのようなインフラを提供し、中身

としてどのようなコンテンツ・人材を対象とするのかをまとめた方がよい。人材については人口減少の中で、学生の起業や海外のアントレプレナーの招聘等で広げる、東京に行った人に人生100年時代の中で戻ってきてもらうなど、現代に合わせたエコシステムにしていただければと思う。

宗田会長

経済界からも強くその観点を盛り込むように言われており、原委員の御尽力も頂きながらまとめていきたい。

めききやたくみなどは京都の産業の特性を表すものであったが、それだけでは説明できない時代になってきているのかもしれない。

原委員

めききやたくみといった言葉は大切なキーワードなので、大事に使う必要があるが、この機会に一新することも良いのではないだろうか。

宗田会長

観光の戦略について、市民の皆様に観光が迷惑を掛けている面もあるが、京都は、バルセロナなどと比較しても観光の課題解決においては世界をリードしている。

早い時期からマイカー観光の抑制等を徹底したことで、近年は自動車ではなく、バスが混んでいる。京都モデルとしてコツコツと取り組んできた積み重ねがあり、その点が他都市と比べても良い点だ。当時、御尽力されていた岡田副市長にもお話を伺いたい。

岡田副市長

今の観光の状況は、あまりにも急激に外国人観光客が増えたことが要因である。かなり早い時期から自動車交通に過度に依存しない取組が進んでいたため、今この状態に留まっているのだろうと思う。とはいえ、これで良いと思っっているわけではなく、市民生活を最重要視し、今現実には起きている問題に対しては、全力で解決に取り組んでいる。

特定地域や交通の混雑への対応のほか、外国人へのマナー問題などについては、出発地、空港などそれぞれの段階でマナーの啓発を行っており、現在、50の取組を中心に進めている。

市民生活を守り、市民の方と海外の方と交流、相互理解ができるまちにしていきたいと思っている。

宗田会長

UNWTO（国連世界観光機関）は、トラベル・エンジョイ・リスペクト、そして、サステナブルツーリズムを進めているが、京都に関しては、観光客が自然にリスペクトを持つ。リスペクトをうまく引き出す力が京都にはある。

花を活ける、まちがきれいといった形で、市民の暮らしの中に京都の文化力が生きることがその要因であり、市民が望まないのなら、これ以上宿泊施設を増やさないと表明された理由でもあると思う。

観光に関しては色々な成果があり、交通以外にも季節変動を平準化した。閑散期を平準化したことで、短期のパート社員を正社員化できるようになり、働き方改革も進めながら、一年間、正規で働いていただけるといったことになったことは観光政策の大きな成果。その成果こそがまさにサステナブルなもの。UNWTOが認めているとおり、世界に輝く

と打ち出してもよいと思う。

川崎委員

バルセロナの場合、ホテル建設を抑えれば交通量も抑制されるという意見に行きがちだが、京都ではホテルの部屋の外だけでなく中までバリアフリーにすることで、施設の質を高めることと同時に、じわじわと総数を抑制することにもつながる。外科的なバッサリとした処方ではない形の知恵があるのが京都だと思う。

岡田副市長

今まさにそのような方向性を打ち出したところである。

宗田会長

長い間、日本はビジネスホテル中心のホテル建設が進んできており、世界遺産が17もある京都にふさわしいホテルがなかったことが泣き所だったが、そういったことを補える方向性が出始めているように思う。

最後に、中馬氏から御意見・御感想などあるだろうか。

中馬氏

担い手育成に関して、10代の若者と大人の接点を増やすことができれば面白いと思っている。親や学校あるいは習い事の先生としか会っていないなかで、多くの子どもは人生を決めている。ここにいらっしゃる方々や好きなことにチャレンジしている大人あるいは面白い大学生などとの接点を増やすことで、こんな生き方や考え方があるのだと選択肢が増える。私の会社では、一番若い子で中学生のインターンがいる。1年いる中で、今は私に費用対効果を含めてプレゼンテーションし、イベントを行うようになっている。こういった人材が増えれば面白い。

また、スタートアップ・エコシステムに関して、全国で起業がブームではあるものの、起業家の数はそれほど増えなくても良いと思う。それよりも事業承継ではないか。大企業に勤めつつ、やりがい求めてくすぶっている若者が多くいる。そのような人と黒字倒産しそうな企業とをつなぎ、企業を守っていけるような仕組みづくりが必要ではないかと感じた。

原委員

先ほどの話では、スタートアップとして、ハイテクモデルを想定されていると思うが、決してそれだけでなく、事業承継でも良い。事業承継であっても起業家のマインドセットを持ち、マネージャーではなく、アントレプレナー、イノベーターとしてのマインドで事業承継することも含めてスタートアップモデルを定義している。ソーシャルスタートアップも含めた概念であり、京都だけでなくグローバルな観点で人材育成していくためのエコシステムが重要。京都企業の4%を占める老舗ももちろん重要で、それこそがまさにグローバルな価値を持っている。一から会社を興すスタートアップだけでなく、持続可能な仕組みの中でマインドセットをもって取り組んでいくことが重要である。

宗田会長

京都はベンチャーの気風があるが、決してそれだけではなく、事業承継として、後継者候補を雇用し、アントレプレナーとして育成していくことを提案していただいたのだ

と思う。

中馬氏

就職活動中の学生と話していてもCMが流れるような有名企業しか見していない。京都には良い企業があり、小学生、中高生から接点を持ち、気が付けば京都の良い企業の方と知り合っていたという形になればよいと思う。

宗田委員

少子化は子どもが多くの人々に接する良い機会にもなりうる。そういった価値観の転換も図っていきたい。

川崎委員

中馬さんの仰っていた優秀な若手を老舗に入れるやり方として、エージェント制度のように、緩やかなつながりから正社員につながるような出会いの場をU35プロジェクト等を通じて展開していただけるとよいと思う。

中馬氏

副産物としてそうしたことも生まれるよう、面白い若者とのコミュニティを作ることがファーストステップとして、今後につなげていきたい。

宗田会長

重点戦略に関しては大筋御賛同いただいた。今後、個別に御意見を頂いて、良いものに修正していきたい。

—事務連絡—

宗田会長

それでは、本日はこれで閉会とさせていただきます。

3 閉会